

# 朝鮮近代文学研究の現状と課題

—韓国での論議を中心に—

布袋敏博

## 1. はじめに

ちょっとしたエピソードを述べることから始めたい。もうすでに早や7年前のことになるが、1995年という年は、朝鮮の、日本植民地からの解放50年という記念すべき年であった。そのため、大韓民国（以下「韓国」と記す）ではさまざまなイベントが行われた。旧朝鮮総督府の建物を取り壊す作業に取り掛かったのもこの年の8月15日であったことをご記憶の方も多いことと思われる。

ところで、私の関心を引いたのは、この解放50周年に焦点を定めて相次いで刊行された、次のような書物であった。（以下、特記なき場合、原文は朝鮮語で、日本語訳名で表記した。また発行所はソウル）

金英植『父、巴人 金東煥—その生涯と文学—』（国学資料院、1994 .11）

金福姫『父、八峰 金基鎮と私の信仰』（正字社、1995.1）

金世媛『わが父、金順男』（ナナム、1995.4）<sup>(1)</sup>

改めて述べるまでもなく、金東煥、金基鎮は文学者、金順男は、解放直後、南朝鮮で活躍し、1948年に北朝鮮に渡った作曲家で、林和作詞の「人民抗争歌」の作曲者でもある。上の著作はいずれも、息子、娘が自分の父親を扱ったものだが、2人の文学者はいわゆる親日派、またプロレタリア作家、音楽家は越北文化人であり、韓国社会にあっては、「親日派」「プロレタリア文学」「越北」ということが長くタブ

一の対象であったために、遺家族はその点に関しては息を潜めるようにして過ごしてきたのである。

いま少し彼らについて述べれば、金東煥は詩人にしてジャーナリスト、その代表作である「国境の夜」は朝鮮近代詩史上、最初の長篇叙事詩として高く評価されている。植民地末期には「白山青樹」と創氏改名し、少なからぬ親日的作品、文章を残した。朝鮮戦争中に拉北され、その後の消息は不明である。金順男は南労党系文化人として後に粛清された。彼らの中で一人金基鎮だけは最後まで南に残った。彼は1921、22年に立教大学に留学、麻生久に私淑し、日本の労働運動に関心を持つ。滞日中、種蒔く人々、クラルテ運動を知り、23年に朝鮮へ帰ってそれらを朝鮮に広め、25年にはカップの創立に関わる。3人の中でこの金基鎮は、生存中は文壇の長老として社会的地位を保っていたが、しかしその彼も、植民地末期には「金村八峰」と創氏改名して活躍し、そのため、例えば今夏（2002年）8月14日に、韓国で民族文学作家会議、民族問題研究所、等の民族団体が発表した「親日文学人42人」<sup>(2)</sup>に含まれている、そのような存在である。

そうした息子、娘が、今こそと、父親の社会的名誉回復を願って公にしたのが上記の伝記、追想記であった。父親たちは、「親日」と「越北」また「プロレタリア文学運動」という行為の結果、それらベクトルは同じ方向を向いてはいないが、いずれも韓国社会にあって指弾の対象、タブーの対象となるという点では共通した、そうした条件を備えていた存在であった。<sup>(3)</sup>

越北文学者の中には、植民地末期に親日行為をし、そのため解放後、南朝鮮にいられず、越北した者もいた。即ち、一部の者にとっては、越北は親日の延長線上にある行為でもあった。

「親日」については、解放から50年を迎えたのを機会に、父親の罪に許しを乞い、名誉回復をとげたいという思いがあったであろう。<sup>(4)</sup>一方、「越北」に関しては、1987～88年に、ほとんどの越・拉北文化人の解禁措置がとられたということが背景にある。ともあれ、こうした「思父曲」ともいふべき書物が相次いで出版されたのを見て、解放

50年という意味をあらためて考え、「親日」「越北」ということをあらためて思ったのだった。

上のエピソードが物語るように、朝鮮近代文学の研究は政治史の背景を抜きにしては語れない部分がある。日本の植民地支配を受けたことと、解放後は朝鮮が南北に分断されている現状が、研究にも否応なく、深く大きく反映しているからである。

朝鮮近代文学の研究は、現在は、南北朝鮮においてはもちろんのこと、日本、中国、米国などでもなされており、地域的な広がりを見せているが、やはり韓国でのそれが中心になっている。本稿も、韓国における研究を中心とした論議にならざるを得ないことを了解願いたい。

本稿の標題は、朝鮮近代文学研究の「現状と課題」であるが、「現状」といっても、まずどこからを「現状」ととらえるか、が問題である。ただ、上でも述べたように、韓国で1987～88年に、越（在）・拉北文学者の解放前作品のほぼ全面的な解禁措置がとられた。管見によれば、これは朝鮮近代文学研究のターニングポイントをなす、近年で最も大きな変化であった。これにより、解放後、特に朝鮮戦争後、片肺飛行を続けてきた朝鮮近代文学史の記述が、韓国ではほぼ十全な形で復元可能になったからである。そうした点を考慮して、本稿では1987～88年以後を広い意味での「現状」と捉える。

また、テーマとしては、朝鮮近代文学研究にあって、二大タブーともいえる対象である（あるいはあった）この「越（在）・拉北文学」と「親日文学」を中心に述べることにする。前者は上述したような状況があるからである。また、後者は、学問的な対象として、あるいは用語として、韓国アカデミズムの中で必ずしもまだ十分に認定されているものではないが、しかし、これは今日にいたっても未だ、社会に深い影を落としているものであり、かつまた、歴史学を中心とする本シンポジウムの主題からいって、むしろ共通した論議対象となりうるのではないかと考えるからである。

これら、ことに「越（在）・拉北文学」（以下、区別する必要のない限り、全体を「越北文学」ないし「越北文学者」と表記する）をめぐ

る環境の変化を見る時、ほんの10数年前のことを考えれば、まさに隔世の感があるが、こうした主題に焦点を絞って、どのような社会的背景から「現状」に至ったか、それを歴史的に概観してみることは、現在の研究動向を構造的に理解するのに役立つ、意味のあることと思われる。そこで、まずこれらに関する研究を中心に、過去の研究史を概観し、その上で、1987～88年以降の動向を追っていきながら、最近の研究状況に触れることにしたい。

とはいえ、朝鮮近代文学研究の現状は、もちろんこの二つのテーマに限られるものではなく、他にも取り上げるべき重要事項・出来事があるので、最近の研究状況の中で、それら重要と思われる研究、資料の公刊、そしてその他の地域での研究動向等についても言及しておきたい。

## 2. 過去の研究史概観—1987年以前

朝鮮近代文学の研究は、すでに植民地期に金台俊や林和らによる小説研究・紹介が見られるが、本格的には、解放後、始まったと見ることができる。<sup>(5)</sup>

その解放後の韓国での近代文学研究は、政治的な条件により、常に制限を余儀なくされ、そうした制限の元に、あるいはまた、社会情勢の変化に対抗する形で進められてきた。そして、管見によれば、そうした観点から見た韓国における近代文学研究は、大きく、①1945年8月15日～1950年6月25日、即ち解放直後から朝鮮戦争まで（第一期）、②1950～53年以後（第二期）、③1965年以後（第三期）、④1987～88年以後（第四期）、の4つの時期に分けることができ、さらに①は、(a)解放～米軍政期（48年8月15日まで）、(b)48年8月15日の大韓民国成立以後、の二期に分けることができる。この時期区分を境に、その時々の特徴的な様相を見せており、それを検討することで、「親日文学」「越北文学」をめぐる問題が浮き彫りにされられると思われるので、以下、上述した4つの時期のうちの①、②、③について述べてみたい。

## (1) 第一期

解放を迎えて、新しい社会、国造りに沸き立つ中で、解放直後には、南朝鮮では「親日」をめぐる論議が見られた。各政党が出した声明の中は、表現こそ違え、それぞれ「親日派」の処理について触れており、また文学者による自己批判も提起された。代表的なものに、1945年12月末にソウルの鳳凰閣で開かれた名高い「文学者の自己批判座談会」（『人民芸術』第2号、1946.10）や、金永錫の「作家の自己批判」（『中央新聞』1945.11.21～22）、韓暁の「文学者の自己批判」（『ウリ文学』1、1946.1）などがある。しかし、こうした動きは、政治情勢の変化も相まって、論議が深められぬままに終わってしまう。

この時期のもう一つの特徴として、最初の近代文学史が書かれ刊行されたという点があげられる。白鐵の『朝鮮新文学思潮史』（首善社、1948.9）、『朝鮮新文学思潮史現代篇』（白楊堂、1949.7）がそれである。ここには「越北文学者」として後には削除される名前が多数含まれている。これについては（2）で触れる。

## (2) 第二期

②は、言うまでもなく朝鮮戦争期で、これにより、南北の亀裂は決定的なものとなり、文学者の扱いも大きく変わらざるを得なかった。この間の変化を端的に示しているのが前述の白鐵の『朝鮮新文学思潮史』、『朝鮮新文学思潮史 現代篇』の改訂過程である。

この白鐵の2冊の『朝鮮新文学思潮史』は（上）（下）をなすもので、朴英熙の『現代朝鮮文学史』（未刊行）<sup>(6)</sup>と並んで、韓国で最も最初期に書かれた近代文学史である。前者、首善社版は1920年代前半の自然主義文学まで、後者の白楊堂版がそれ以後の、プロレタリア文学を中心とした記述になっている。これが、朝鮮戦争中に改訂版が準備されて、前者、首善社版部分が初版『新文学思潮史』（民衆書館、1953）として刊行され、さらに、首善社版と白楊堂版の合本の形で、再版『新文学思潮史』（同、1955）として刊行された。これは以後も改訂を加えながら、現在も新丘文化社から出されている。

問題は、この再版『新文学思潮史』（以下、「改訂版」とする）の改

訂内容である。その目次を、首善社版と白楊堂版の目次とともに掲げれば次の通りである。

(首善社版)	(改訂版)
緒論 近代思潮と朝鮮の新文学	緒論 近代思潮と朝鮮の新文学
第一章 開化思潮と新小説文学	第一章 開化思潮と新小説
第二章 民族主義即理想主義と新文学運動の草創期	第二章 民族主義と新文学の草創期
第三章 近代文芸思潮と少壮文学の純文学運動	第三章 文芸思潮の混流と純文学運動
第四章 頹廢的へと文学が病んだ時代	第四章 頹廢的へと文学が病んだ時代
第五章 浪漫主義の全盛時節	第五章 浪漫主義「華麗な時節」
第六章 朝鮮新文学の水準と自然主義の位置	第六章 新文学の水準と自然主義の位置
第七章 主潮の外に立った諸傾向の文学	第七章 主潮の外に立った諸傾向の文学
(以下、白楊堂版)	
第一章 朝鮮新文学の再出発期 新傾向派文学の登場	第八章 新傾向派後十年間
第二章 プロレタリア文学十年間の制覇と民族派・折衷派等文壇春秋時代	
第三章 ファシズムの台頭、世界の危機と現代文学思潮の分化期	第九章 情勢の変転と芸術派の新興
第四章 危機！一九三六年以後主潮喪失と文学至上時代	第十章 暗黒期と文学至上の時代
第五章 第二次世界大戦の烈風と朝鮮現代文学史上の暗黒期	

第六章 解放後、二大思潮の渦  
流中新出発した文学運動  
の概観

以上の目次から、首善社版部分は、改訂版にほぼそのまま収録されていることがわかる。しかし、白楊堂版部分は、改訂版では大きな変更が加えられている。即ち、プロレタリア文学を中心とした記述はすっぱり抜け落ち、また、親日問題と関わってくる植民地末期＝暗黒期の記述も削られているのである。目次では第十章に「暗黒期」の文字が見えるが、内容は、白楊堂版の第四章に相当するもので、白楊堂版の第五章に相当する、植民地末期に関する記述は削除されている。さらにまた、解放直後の文学運動を述べた第六章も削除されている。

これは何を物語っているのだろうか。言うまでもなく、解放前のプロレタリア文学運動、また解放直後の文学運動の中心をになった文学者たちは、大部分越北した者たちであり、彼らは朝鮮戦争以後はタブーの存在となったからである。また、植民地末期の文学者の親日行為は、解放直後に取り上げられ、文学者自身による自己反省もなされつつあった<sup>(7)</sup>が、十分に論議がなされないままに終わった。そして、反省作業に取り掛かった者たちが大挙北に渡った後、植民地末期の行為については、南に残った文学者たちの間では、暗黙裡に封印されてしまったことを意味する。

こうしてみると、この白鐵の著作の変遷に、既にして今日に繋がる「越北」「親日」の問題が鮮やかに表われていることがわかる。<sup>(8)</sup>

(3) 第三期－「親日文学」と「越北文学」問題の再登場

③は1965年の日韓基本条約締結に伴うものである。61年の朴正熙らによる軍事クーデターのあと、62年に大平・金鍾泌メモで請求権問題が落ち着し、遠からず日本と国交が結ばれるかも知れないという展望が見えてくる。こうした動きは、文学研究者たちに、強い懸念を持って受け止められ、文学史の再検討を促した。それらは、張徳順

(1921～2000)の「日帝暗黒期の文学史—1940年から45年までの非様式の国文学」(『世代』4～7、1963.9～12)、林鍾国の『親日文学論』(平和出版社、1966)といった研究成果となって表われた。日本の再登場が、いわゆる「親日文学」について、解放直後を別にすれば最初の問題提起をなさしめたのである。<sup>(9)</sup>

中でも、この問題を持続的に追及したのは林鍾国である。『親日文学論』の衝撃は大きかったはずであるが、長く黙殺された。以後もほとんど林の孤軍奮闘というに近く、<sup>(10)</sup>林は次第に研究範囲を文学から各分野全般へと広げていくことになる。

また、研究者第二世代<sup>(11)</sup>に属する金允植(1936～)の大著『韓国文芸批評史研究』(ハノル文庫、1973、のち改訂版、一志社、1976)も同様な脈絡で捉えることができるのではないかと思われる。この著書の核となる部分は、1967年に発表された「韓国文芸批評史に対する研究—1923年から1935年まで—」<sup>(12)</sup>である。この論文は、当時、ほとんど言及されなかったプロレタリア文学の系譜を初めて叙述したものであった。ここで扱われた文学者の多くは、越・在北文学者たちである。この、朝鮮近代文学の中心をなす部分でありながら、政治的理由からタブーとされていた領域に果敢に取り組み、しかも人名を伏字なしに記述した行為は、執筆者の学問的誠意・熱情の表われであるといえる。と同時にそれは、日韓条約締結によって日本が再浮上してきたことを、執筆者自身が生きている時代の一つの危機として捉え、それに対し研究者としてどう対処すべきかを深慮した上での学問的行動、意思表示ではなかったかという解釈も可能ではないかと思われる。<sup>(13)</sup>

さらに、研究ではないが、朴景利の「土地」執筆開始(1968)もこうした時代背景を抜きにしては考えられないであろうし、『創作と批評』誌の創刊(1966)も同様のことが指摘できるのではないかと思われる。

こうして、日韓条約締結を契機に、朝鮮戦争以来、封印されていた「親日文学」が取り出され、またプロレタリア文学研究という形で「越北文学者」が扱われることになるのである。



### 3. タブーの消滅、研究の広がり—1987～88年以後

以上のような過程を経て、直接現在の研究状況に繋がる1987～88年の変化を迎えることになる。これ以降が本論である。ここでは、できるだけ研究の現状を多面的に紹介するため、まず時間的推移にしたがって「越北文学」と「親日文学」をめぐる状況の変化を概観し、さらに角度を変えて、より幅広くその他の研究状況を見てみることにしたい。

#### (1) 「越北文学」の場合

##### (a) 1987～88年の3次の解禁措置と自由の獲得

1987～88年の越(在)・拉北文学者の解禁措置は、①1987年10月19日措置、②1988年3月31日措置、③同年7月19日措置、の3段階を経て行われた。

もっとも、越(在)・拉北文学者の解禁措置はこの時が初めてではなく、1978年3月13日措置がそうした最初のものである。<sup>(14)</sup>次いで1982年にも動きがあったが、進展はなかった。<sup>(15)</sup>ところで、この78年の3.13措置は、①解放前の、②純粹文学で、③現在生存していない越(在)・拉北文学者に限って、文学史研究としての学問的論議を許可する、という限定的なものであり、しかも制度上はそうでありながらも、それらを論じた論文を含む著書が発禁書に処せられる<sup>(16)</sup>こともあるという、時代の制約下にあった。

これに対して、1987～88年の措置は、次のような包括的なものであった。

##### ① 1987年10.19措置：越・在拉文学者に対する論議の全面的解禁。

これにより商業出版が可能になった。その最初の成果として、金澤東の『鄭芝溶研究』(民音社、1988)があげられる。

- ② 1988年3.31措置：鄭芝溶、金起林の作品の解禁。これにより、『鄭芝溶全集』（全2巻、民音社、1988）、『金起林全集』（全6巻、尋雪堂、1988）が刊行された。
- ③ 1988年7.19措置：洪命憲、李箕永、韓雪野、趙靈出、白仁俊の5名を除く、解放前の越・在北文学者の全面解禁。

最後の7.19措置はほぼ全面解禁に等しく、しかも除外された5名についても、李箕永や韓雪野の作品集が出版されるなど、実質上、雪崩的に解禁状態となっている。<sup>(17)</sup>

したがって、この1987～88年の変化により、韓国における近代文学研究は、初めてほぼ全面的な自由を得たといえることができる。

これはまた、その時代背景を考えてみる時、一層そうである。即ち、こうした法的解禁措置が、決して上から与えられたものではなく、韓国民主化運動の結果もたらされた成果であったという点である。87年12月の大統領選挙、88年のソウルオリンピックを控えて、86年、87年は、韓国でかつてなく民主化運動が盛り上がりを見せた年であった。そしてその結果、広く知られているように、87年6月29日、当時、全斗煥大統領の後継者と目されていた与党の盧泰愚氏は、大統領選挙の直接選挙や、当選した場合、社会の民主化を約束すること等を含んだいわゆる「6.29宣言」を発表せざるを得なかった。越（在）・拉北文学者の解禁措置も当然にこうした政治状況の変化と無関係ではない。言い換えるなら、72年から長く続けられてきた民主化運動が87年～88年のこの出版の自由を導き寄せたのである。

以上からわかるように、この1987～88年の一連の越（在）・拉北文学者の解禁措置は、近代文学研究にとって大きな転換点となり、以後、時間的な推移に従った漸進的な広がりを見せていくことになる（→解放空間の文学研究 → 50年代文学研究 → 北朝鮮文学研究）。

そしてこの結果、1987、88年は禁じられていた資料の洪水とでもいうべき出版ラッシュとなり、またさまざまな記念シンポジウムも開かれた。<sup>(18)</sup> 出版物は枚挙に暇がないが、この時期の主なものを列挙す

れば次のようである。

『白石詩全集』(1987)／『吳章煥詩全集』(全2巻、1988)／『李庸岳詩全集』(1988)(以上、創作と批評社)／『崔曙海全集』(全2巻、文学と知性社、1987.7)／『失われた作家と作品—1930年代後半期世代』(キップンセム、1988.2)／『金八峰文学全集』(全6巻、文学と知性社、1988.8)／『李泰俊文学全集』(全18巻、瑞音出版社、1988.8)／『李泰俊全集』(全17巻、キップンセム、1988.10～。途中から『李泰俊文学全集』とタイトルを変更し、越北後の作品も含め、刊行中)／『北に行った作家選集』(全10巻、乙酉文化社、1988)／『カップ詩全集』(全2巻、時代評論、1988.11)／『韓国解禁文学全集』(全18巻、三省出版社、1988.11)／『越北作家代表50人選』(全24巻、瑞音出版社、1988)／韓国近現代民族文学叢書として『趙明熙選集』『林和全集』『韓雪野選集』『李箕永選集』(以上、プルピッ、1988～、途中で中断)／『東光民族文学全集』(東光出版社、1989～、途中で中断)／『朴泰遠全集』(キップンセム、1989.2～。越北後の作品も含め、刊行中)

(以下、影印本)

『韓国近代短編小説大系』(全35巻、1988.5)／『韓国近代長編小説大系』(全30巻、1988.11)／『韓国現代詩史資料集成』(全46巻。このうち第24巻～第46巻が越北詩人の作品集。以上3種の大系、集成は太学社刊)

これを研究成果の面から見てみると、主なものは次のようである。

金允植・鄭豪雄編『韓国近代リアリズム作家研究』(文学と知性社、1988.2)／金允植・鄭豪雄編『韓国文学のリアリズムとモダニズム』(民音社、1989.1)／金允植『林和研究』(文学思想社、1989.12)／権寧珉編『越北文人研究』(文学思想社、1989)／金允植『韓国現代現実主義小説研究』(文学と知性社、1990)／徐経錫「韓雪野文学研

究」(ソウル大学博士論文、1991.2。のち『韓国近代リアリズム文学史研究』太学社、1998.4に収録)／金興植「李箕永小説研究」(ソウル大学博士論文、1991)／李相瓊「李箕永小説の変貌過程研究」(ソウル大学博士論文、1992)／イ・サンガップ『1930年代後半期創作方法論研究』(高麗大博士論文、1994。のち『韓国近代文学と転向文学』キップンセム、1995.8に収録)／金外坤「近代文学の主体概念批判—金南天を中心に—」(ソウル大学博士論文、1995.2。のち『韓国近代リアリズム文学批判』太学社、1995.11に収録)／李羲煥「金東錫文学研究」(仁荷大学修士論文、1995.2)／蔡燾 他、『越北作家に対する再認識』(キップンセム社、1995.7)／セミ作家論叢書(図書出版セミ、1995～)：1『李箕永』、2『朴泰遠』、3『金南天』、4『白石』、5『李泰俊』、6『洪命憲』、10『金起林』／李美林『越北作家小説研究』(キップンセム社、1999.10)

#### (b) 解放空間の文学研究

この次に、(a)と重なり合いながら、解放空間へ関心が集中する。解禁措置により、植民地期の失われていた名前が復活すると、今度は、「解放空間」という、失われていた時間が取り戻されたのである。

研究の先駆的なものとして、1979年から刊行が開始された『解放前後史の認識』(全6巻、ハンギル社)があり、これがこの分野を切り開いていった功績は大きい。文学関係では、金允植がいち早く、「民族の罪人と罪人の民族—蔡萬植の場合」(『随筆文学』46、1976.3)と『韓国現代文学史—1945～75』(一志社、1976.12)を発表し、先鞭をつけている。前者の論文は、文学者が植民地末期の自己の行動を反省し、文章化したほとんど唯一の例である蔡萬植の「民族の罪人」を分析したものである。この解放空間での文学者の自己批判を検討する作業は、鄭豪雄が引き継いで行なっている。

また、権寧珉『解放直後の民族文学運動研究』(ソウル大出版部、1986)も豊富な資料をもとに当時の運動勢力の動きを再現している。

この時期に刊行された資料集としては、以下のようなものがある。

『韓国現代文学資料叢書（1945年8月～1950年6月）』（全17巻、編集部編、コラム、1987）／『解放空間の文学・詩』1、2（申範淳編、1988）、『解放空間の文学・小説』1、2（金昇煥編。以上、トルベゲ、1988）／『解放3年の批評文学』（辛炯基編、世界、1988.8）

研究として主なものをあげると次のようである。

金允植『解放空間の文学史論』（ソウル大出版部、1989.11）／金容稷『解放期の韓国詩文学史』（民音社、1989）／金昇煥「解放空間の農民小説研究」（ソウル大学博士論文、1990。のち『解放空間の現実主義文学研究』一志社、1991）／申範淳「解放期詩のリアリズム研究」（ソウル大学博士論文、1990）／李佑庸『解放空間の民族文学史論』（太学社、1991.2）／辛炯基『解放期小説研究』（太学社、1992.10）／鄭豪雄「解放空間の自己批判小説研究」（ソウル大学博士論文、1993.1。のち『韓国現代小説史論』セミ、1996）

こうして、越北文学者の解禁に始まる変化は、解放空間への研究領域の拡大に続いて、1992年の韓中国交樹立による北朝鮮資料の流入へと続き、さらに2000年6月の南北首脳会談の実現後は、北朝鮮文学研究に大きく拍車がかかるような事態になってきている。この方面でのタブーが極めて弱くなったといえる。

一方、こうした資料面での制約からの開放が進む反面、ソ連、東欧圏の崩壊により、研究の中心がリアリズム文学からモダニズム文学へと移っていったのも、この過程での特徴的なことであった（これらについては、「3 全般にわたる研究動向」で述べる）。

## （2）「親日文学」の場合

一方、「親日問題」は、林鍾国がその範囲を文学以外に拡大して、

変わらず旺盛な活動を見せ、<sup>(19)</sup>また反民族問題研究所を設立して、かつてのような孤軍奮闘ということはなくなった。91年に林が亡くなった後も、後継者たちが民族問題研究所と改称して活動を続けている。また関係する単行本も多数刊行され始めた。<sup>(20)</sup>しかしながら、本格的な研究、また信頼するに足る基本的な原典資料の出版<sup>(21)</sup>となると、意外なほど多くない。

それは文学でも同様である。「親日問題」が比較的多く論議され始めるのも、「越北文学」の解禁とほぼ時期を同じくしている。したがって、「親日文学」も、それ以降、「越北文学」がそうであったように、活発に資料が出され、論文が書かれてもよさそうなものだが、そうっていない。これは、「越北文学」が、ある意味では、法律の規制だけの問題であり、その枠が取り払われれば、解放前に限れば、あるいはまた、解放後も越北前の南朝鮮での活動に限れば、取り上げるのに躊躇する理由はない。それに対して、「親日文学」は、用語の問題、<sup>(22)</sup>作品の数的なことに加えて、明確な概念規定があるわけでもなく、関係者遺家族の存在など、はるかに微妙かつ複雑な問題がからみあっているからであろう。

そうした現状にあって、李京墳の仕事は注目すべきものといえる。この間の主な研究としては、次のようなものがある。

徐淵昊「親日演劇運動の展開様相」上・下（『文学精神』1989.2～3）／宋敏鎬『日帝末暗黒期文学研究』（セムン社、1991）／李熙教「日帝末期小説研究－御用性と純粋指向の二つの側面について－」（高麗大学大学院博士論文、1992.6）／李京墳「転向小説論」『成ギジョ先生華甲記念論文集』（シンウォン文化社、1993.6）／李京墳「白鐵の親日文学論」『延友論集』（1994.2）／李京墳「李光洙の親日文学研究－彼の政治的理念と連関して－」（延世大学大学院博士論文、1995.2）

こうした刊行物のほかに、1995年には、民族文学作家会議の主催で、

解放50周年の記念シンポジウムも開かれた。<sup>(23)</sup>

この「親日文学」に該当する分野は、日本語で書かれている作品が多いこともあり、以前から日本で多くの研究がなされてきている。<sup>(24)</sup>近年の特徴としては、まず、目録・資料の整理が行なわれつつあることがあげられる。次のようである。

『国民文学』全39巻の影印刊行（大村益夫編、緑蔭書房、2000）／『近代朝鮮文学日本語作品集－1939～1945』（全9巻、緑蔭書房、2001、2002）／『朝鮮文学関係日本語文献目録－1882.4～1945.8』（早大大村研究室、1997.1）／『『毎日新報』文学関係記事索引－1939.1～1945.12.31』（早大大村研究室、2002.2）、（以上、大村益夫・布袋敏博共編）／『日本植民地文学精選集 朝鮮編』（白川豊監修、全12巻、ゆまに書房、2000、2001）（いずれも発行所東京）

この「親日文学」はまた、角度を変えて「日本語文学」として、論じられてもいる。そうしたアプローチは、日本文学側からもなされ、また、旧「満洲」地域での朝鮮文学については中国文学側からの接近もなされている。それらを含めた研究論文は数多く、すべては網羅できないが、近年の中から主なものを掲げると次のようである。（特記ない限り、発行所は東京）

大村益夫「大東亜文学者大会と朝鮮」（早大『社会科学討究』100、1989）／同「『青年作家』と濟州島出身の作家」（早大『語研フォーラム』4号、1996.3）／任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史』（法政大出版局、1994）／白川豊「張赫宙研究」（東国大学博士論文、ソウル、1989）を始めとする一連の張赫宙研究、同『植民地期朝鮮の作家と日本』（大学教育出版、岡山、1995）／白川春子「李光洙の日本語小説について」（『年報朝鮮学』5、福岡、1995.7）／藤石貴代「金鍾漢論」（『東洋史論集』17、福岡、1989.1）／布袋敏博「日帝末期日本語小説研究」（ソウル大学修士論文、1996.2）／中山和子

「植民地末期の朝鮮文壇と日本語文学（1）」（明治大『文学研究』69、1993.2）／岡田英樹「旧「満州国」の朝鮮人作家について」（『昭和文学研究』25、1992）

韓国で、「日帝末期日本語小説研究」といった主題が学位論文として認められるようになったところにも、韓国の研究風土の変化、広がりを見ることができる。さらにこの「日本語作品」を研究対象として捉える姿勢から、「二重言語」文学という研究も始まっている。そしてこれは植民地末期に限定されない。

『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』（鄭百秀、亜細亜文化社、2000.3）／『韓日近代文学の関連様相新論』（金允植、ソウル大出版部、2001.7）

この日本語作品については、日本文学専攻者側からの比較文学的接近も多く見られるようになったのが、やはり近年の特徴である。南富鎮の著作が代表的なものである（『近代文学の〈朝鮮〉体験』（2001.11）、『近代日本と朝鮮人像の形成』（2002.7）いずれも勉誠出版）。

ところで、「親日文学」で大きな変化は、親日文学の再定義が試みられようとしている点である。金在湧は、最近の論文「親日文学の性格究明のための試論」（『実践文学』65、2002年春号、2002.2）で、これまでとは違い、日韓併合前後と日中戦争以後の「親日行為」を区別しなければならず、後者の場合、文学者たちが支配者たちから抑圧を受ける状況下にあったことを考慮した上で論じる必要がある、として、新たな問題提起をしている（前掲、pp.162～3）。

即ち、日本語で作品活動をしたとか、親日的団体に所属したとか、創氏改名をしたとかいう者をすべて、それだけで「親日」とするの是非常に「素朴な理解」であり、こうした「素朴な理解」は乗り越えなければならない。「親日」とみなす基本的な判断基準は、①大



東亜共栄圏の戦争への動員を呼訴・加担、②内鮮一体の皇国臣民化を推進、という2つあるいはそのいずれか一方に該当するもので、そうした立場を表わし宣伝した文学が「親日文学」であり、そうした文章を著した人物が「親日文学者」である、と規定している（前掲、pp.168～170）。

こうした認識は、今年8月14日に発表された「親日文人42人」の選定にも反映している。<sup>(25)</sup>

しかし、この議論は、いま少し時間をかけて、各文学者個別に詳細に検討する余地があるように思われる。今後の課題である。

以上、(1)(2)では、政治状況の変化に焦点を定め、それに伴う文学研究の環境の変容と研究成果を概観してみた。

### (3) 全般にわたる研究の動向

ところで、角度を変えて、近代文学研究全般に目をやると、特徴的なこととして、次のような事項を確認できる。即ち、①個人全集発刊等、テキストの整備、②肉筆原稿の刊行、③評伝の刊行、④視点の移動、⑤北朝鮮の資料目録、原典等の刊行、⑥研究会の新たな組織化、等である。これらの項目を中心に再整理すると、以下のようである。

#### (a) テキストの整備と対象の再評価

1987～88年以降の特徴の一つとして、個人全集の活発化があげられる。それは、越北文学者の解禁措置により、当然に、それまで扱われなかった多くの文学者の資料集成が行われつつあるからである。と同時に、それ以外の文学者についても、テキストの整備・再整備が進んだからである。未刊行作品の活字化などがなされているのも、顕著な傾向である。廉想渉の未刊行長篇の出版、また、『無情』や『三代』の初出新聞連載分の単行本化がそれである。既述分との重複を避けて、主なものを掲げれば次の通りである。

『廉想渉全集』(全12巻、別巻1、民音社、1987.4)／『原本金裕貞全集』(翰林大学出版部、1987.8)／『蔡萬植全集』(全10巻、創作と批評社、1987.11)／『玄鎮健全集』(1988年～。4巻で中断)／『朴魯甲全集』(全3巻、キップンセム、1989.11)／影印版『金台俊全集』(全4巻、宝庫社、1990.5)／『今日の文学と文学の今日 李源朝文学評論集』(李東英編、蛍雪出版社、1990.7)／『カップ批評資料叢書』(全8巻、嶺南大学出版部、1990.10)／『田榮沢全集』(全5巻、牧園大学出版部、1994)／『韓国近代美術の師匠 金復鎮全集』(青年社、1995.8)／『咸世徳文学全集』(全2巻、知識産業社、1996.7)／『朴英熙全集』(全4巻、李東熙・盧相來共編、嶺南大学出版部、1997.11)／『洪海星演劇論全集』(全2巻、嶺南大学出版部、1998)／『姜敬愛全集』(李相瓊編、ソミョン出版社、1999.4)／『羅蕙錫全集』(李相瓊編、太学社、2000.1)／『原本 晶月羅蕙錫全集』(徐正子編、国学資料院、2001)／『金南天全集』評論I・II(鄭豪雄・孫禎秀共編、パギジョン、2000.3。続いて創作篇続刊予定)／『林和全集』1、2(金外坤編、パギジョン、2000.6～刊行中。／『林和全集』はもう1種類が共同編集で準備されている。)／『朴勝極全集』第1巻(学民社、2001、刊行中)

『盧天命全集』全2巻(ソル、1997.7)／『李箱全集』全5巻(文学思想社、1997～2001)／『白石全集』(実践文学社、1997)／『李相和詩全集』(イ・サンギョ編、チョンニム社、1998)／『吳章煥全集』(実践文学社、2002.2)

廉想渉：『狂奔』(1996)／『不連続線』(1997、以上、プレス21)／『暁風』(実践文学社、1998)

新聞連載本：『無情』『三代』『無花果』(以上、東亜出版社、『韓国小説文学大系』に収録、1995)

雑誌：『三千里』(全32巻、1995.12、ハンビッ)

以上のようなテキスト整備と相まって、新たな角度から検討しようという気運が見られる。

これには、この近10年ほどの間に、ちょうど生誕100年を迎える文学者が多いということも作用しているものと思われる。関係書籍として以下のようなものがある。

『廉想渉文学の再認識』（文学と思想研究会編、キップンセム、1998.2）／『廉想渉文学の再照明—廉想渉先生誕生100周年記念論文集』（文学と批評研究会編、セミ、1998.2）／『廉想渉長篇小説研究』（金慶洙、一潮閣、1999.2）／『蔡萬植小説 談論の詩学』（禹漢鎔、開文社、1992.9）／『蔡萬植文学の再認識』（文学と思想研究会編、ソミョン出版社、1999.9）／『韓雪野文学の再認識』（文学と思想研究会編、ソミョン出版社、2000.12）

#### (b) 肉筆原稿等の写真版刊行

テキストの整備という点からいえば、近年、また重要な成果が見られる。尹東柱が遺した自筆原稿が写真版で刊行されたことである。周知の通り、尹東柱の作品は生前は集成・刊行されることなく、解放後、弟の尹一柱によって『空と風と星と詩』（初版1948、増補再版1955、正音社）として編纂・出版され、今日まで定本として広く流布されてきた。ところで、遺族によって大切に保管されてきたその自筆原稿がカラー写真版で刊行されたのである。

朝鮮近代文学は、社会的条件などにより、自筆原稿が保存されている例は極めて少ないが、尹東柱の場合はその稀有な例の一つである。この自筆詩稿の刊行は、今後の尹東柱研究に大きく貢献をするものと思われる。

この出版に刺激されたのか、いくつか写真版書籍の刊行が見られた。一括掲げれば次のようである。

大村益夫他編『写真版 尹東柱自筆詩稿全集』民音社、1999.3.

- 1) / 『作故文人48人 肉筆書簡集』(金英植編、マンヨン、2001.  
8.16) / 『趙芝薰全集 別巻 (肉筆原稿の写真版)』(ナナム、2001)

ところで、近年刊行された増補版『金祐鎮全集』の第3巻も、金祐鎮の日本語手稿本の写真版で、これも貴重なものである。今後こうした眠っている資料に日が当てられることを願いたい。

### (c) 評伝、伝記的研究

文学者の評伝は、古くは趙容万の『六堂崔南善』、朴啓周・郭鶴松の『春園李光洙』などが知られているが、ことに1980年代に入ってから発表された、『李光洙とその時代』を初めとする金允植による一連の評伝は注目に値する。<sup>(26)</sup>この作業に続くものとして、80年代末以降もいくつか重要な著作が見られる。次のようである。

『林和研究』(金允植、文学思想社、1989) / 『金東里とその時代』(全3巻、金允植、民音社、1995~97) / 『李孝石—文学と生涯』(李相沃、民音社、1992.1) / 『碧初 洪命憲研究』(姜玲珠、創作と批評社、1999.11) / 『人間として生きたい 永遠の新女性、羅蕙錫』(李相瓊、ハンギル社、2000.2) / 『愛する大陸よ—詩人金竜濟研究』(大村益夫、大和書房、1992.3)

### (d) 視点の移動—リアリズムからモダニズムへ

国内の民主化に加えて、1989年ベルリンの壁崩壊、続くソ連、東欧圏の崩壊、そして米ソ冷戦構造の終焉、という国外事情、国際情勢の大変動が起こり、ここにいたって、韓国における近代文学研究はその基本条件が大きく変わることになる。

この情勢変化により、文学研究も、それまでの中心をなしていたリアリズム文学の研究から、モダニズムそしてポストモダニズム文学研究の盛行へと変わっていく。金允植・鄭豪雄共編による3冊の共同研究論文集『韓国リアリズム小説研究』(文学と批評社、1987.11)、『韓

国近代リアリズム作家研究』(文学と知性社、1988.2)、『韓国文学のリアリズムとモダニズム』(民音社、1989.1)は、いわば共同研究三部作ともいえる成果であるが、その研究対象の変化が、この間の急激な研究風土の変化、環境の移り変わりを物語っている。

そうして、李箱は、今日、韓国の近代文学研究の中で最も人気のある研究対象となっている。李箱学会が発足したのも、時代の空気を反映している。

また、巨視から微視へ、と観点が移りつつあるのも今日的傾向である。そうした視点を示した、考視学的な研究に、次のようなものがある。

蔡渙哲「1934年京城、幸せ探し 朴泰遠の「小説家仇甫氏の一日」」  
〔『韓国近代文学と啓蒙の叙事』ソミョン出版社、1999.10〕／李京  
墳「三越、近代のショーウィンドー文学と風俗1」〔『韓国近代文学と日本文学』韓国文学研究学会編、国学資料院、2001.1〕

#### (e) 北朝鮮資料の流入と、資料目録、原典等の刊行

最近の環境の大きな変化の一つとして、北朝鮮の原典資料が刊行されていることがあげられる。これは、88年以降、この近10余年の最も特徴的な研究動向、研究成果に数えられるものであり、かつまた、植民地期研究と直結する事項でもあるので、ここでとりあげておきたい。

越北文学者の植民地期の作品が自由に扱われるようになり、解放直後の南朝鮮での動向も取り上げられるようになると、次は必然的に彼らの北に越えていった後の動向に関心が行くようになる。これには、1992年8月24日の韓中国交樹立が大きな役割を果たした。即ち、中国の延辺を中心とする朝鮮族自治州との交流が活発化する過程で、延辺大学図書館や延辺州図書館等、中国東北地方に所蔵されていた北朝鮮資料の流入を呼び、北朝鮮文学研究を促進させ、関係資料の発刊などに繋がっていったのである。さらに、金大中政権発足後、南北首脳会談が実現したことにより、研究にいつそう拍車がかかり、北朝鮮文学

に関心を寄せなかった者までが文を書くような事態を引き起こしている。

この影響の代表的なものとして『朝鮮文学』の影印刊行があるが、その初期の号には、植民地期から活躍している文学者の作品が多く掲載されており、やはり植民地期文学研究の一環として重要な資料である。これは、2000年6月15日に南北首脳会談が行われたという事実なしには考えられない現象である。

また、『労働新聞』のマイクロフィルムは、これまで米国議会図書館蔵版が流布しているが、昨年中国で、議会図書館版に欠けている部分を多く含む中国所在の同新聞がマイクロ化されている。これにより、例えば、1953年8月7日の林和たちの判決文を原文で見ることができるようになった。これら主な刊行物は次の通りである。

『現代文学批評資料集（以北編）』（李善栄、金柄珉、金在湧共編、全8巻、太学社、1993.10）／『北韓『文学新聞』記事目録（1956～1993）』（金ソンス編、翰林大学アジア文化研究所、1994.12.15）／『朝鮮文学 1947創刊号～2000.12』（延辺文学月刊社、大訓書籍、2001）／南北朝鮮『統一文学全集』全100巻（主幹：文芸振興院、編集委員：李善栄、金允植、柳敏栄、徐淵昊、金栄敏、任軒永、崔東鎬、金在湧、2003年3月CD-ROMとして出版予定）

#### (f) 研究会の新たな組織化

韓国において、研究組織は、従来、多くは出身大学別、あるいは指導教授別に組織されている。例えば、ソウル大「文学史と批評研究会」、延世大「韓国文学研究会」「文学と思想研究会」等である。こうした従来型の縦割り構造に飽き足らない、若手研究者たちによる各大学横断的な研究者の組織化が見られるのも、近年の特徴の一つである。そうした例として次のようなものがあげられる。

民族文学史研究会：機関誌『民族文学史研究』1992創刊／尚虚学会

(1992年12月結成：『近代文学と九人会』（キップンセム、1996）  
など共同論文集多数）／李箱文学会（2001年9月結成：機関誌『李  
箱レビュー』2001創刊）／韓国劇芸術学会（1987年4月結成：機関  
誌『韓国劇芸術研究』）

(g) その他

以上に含まれないものとして、次のような研究が見逃せない。

① 金榮敏『韓国近代小説史』（ソル出版社、1997、のちソミョン  
出版社より再刊）

本書には二つの特徴がある。一つは近代文学の起点問題に関わる  
点で、李光洙の『無情』を新小説の最後の完成と見、近代小説は次  
世代の金東仁たちから始まるとするものである。しかしこの観点は  
既に、河東鎬、また朱鍾演らが早くに提出している。もう一つは、  
叙事文学として、新聞の社説を取り上げていることである。しかし、  
開化期からのルートは一つ二つでなく、いま少し他のルートも検討  
する必要があるのではないか。参考研究として、鄭善太『開化期新  
聞論説の叙事受容様相』（ソミョン出版社、1999）があげられる。

② 田尻弘幸「李人植の都新聞社見習時節－「朝鮮文学 寡婦の夢」  
等新資料の紹介を中心に」『語文論集』第32集、高麗大文学科、  
1993：

李人植が、日本に留学していた1902年に日本語小説「寡婦の夢」  
を発表していた事実を明らかにしたもの。それまでは、朝鮮人文学  
者の書いた日本語作品としては、李光洙が1909年、明治学院留学中  
に発表した「愛か」が最も早い時期のものとして知られていたが、それを  
さらにさかのぼらせた新資料の発掘である。この論文により、これ  
まで不明であった李人植の滞日中の行動が相当部分明らかになった。

③ プロレタリア文学研究として、金在湧『民族文学運動の歴史と  
理論』1、2（1990、1996、ハンギル社）、呉皇禪「中西伊之助論」  
明治大学修士論文、権寧珉『韓国階級文学運動史』（文芸出版社、  
1998.9）などが従来の研究に新しい発見・知見を加え、前進させて

いる。

#### 4. 問題点と今後の課題と願望と一終わりに代えて

以上、見てきたように、今日、韓国における近代文学研究は、1987～88年の越北文学者の解禁措置により、大きなタブーの一つがほぼ消滅し、研究範囲の拡大が見られ、テキストの整備などとも相まって、かつてない多様性を獲得しつつある。<sup>(27)</sup>

しかし、とって、まったく障害物がなくなったわけではもちろんない。忠清北道にある洪命憲文学詩碑は、裏の事跡が削り取られている。右翼団体が、洪命憲の文学詩碑建立に猛烈に反対し、やむなく建立委員会は裏面の事跡を削ることで妥協したのである。また、韓雪野も全集を出すのはまだなかなか容易ではない。一方、その文学史的位置からいって、当然に全集が出ていしかるべき愈鎮午は、親日問題がからんで、実現しない。家門に関わる問題であり、これも容易ではない。

こうした韓国社会に内包される問題点とは別に、研究上の課題として、以下のようなことが要求される。

- ① 親日文学者という時の概念の明確化。先にも引用した、今年8月に発表された「親日文人42人」の選定から、金史良と金鍾漢が外れたのは結構なことと思うが、その境界がどこにあるのか不明瞭。
- ② テキスト・クリティークをへた個人全集の刊行：  
その際、(a) 植民地末期の空白を埋めていること（かつての『李光沫全集』のようでない）、(b) 活躍が南北朝鮮にまたがっている場合、その両方をカバーしている、(c) さらに、使用言語の問題で、日本語でも作品を発表している場合、その日本語作品も収録していること、(d) その際、日本語原文と朝鮮語原文の両方が収録されていることが望ましい。
- ③ ②の事柄を実行しようとするれば、資料の調査、掘り起こし、収



集のような着実な基礎作業が必要である。そうした着実な基礎作業の持続的実行。

- ④ そのような着実な事実調査に基づいた研究。
- ⑤ 資料の保存。できれば日本近代文学館のような朝鮮近代文学館の建設。

いずれもあらためて述べるまでもない基本的、原則的な事柄ばかりであるが、③④といった項目をあえて記すには、次のような筆者なりの思いがあるからである。

筆者は、朝鮮語を母語としない一外国人研究者として、研究対象には限りなく謙虚でありたいと心がけてきたし、今後もそうありたいことにいささかも変わりはない。研究をするのにどのような方法がいいか、どのような補助線を引けばいいか、常に暗中模索している。可能な限り資料を調査しようとするのも、能力に乏しい自らを省みてのことである。それを申し述べた上で、以下のことを述べておきたい。

これまで記してきたように、1987～88年に越・拉北文学者に対する実質上の全面解禁措置がとられた。したがって、韓国人研究者も、資料を見るのに、制度上の障壁はほぼなくなったといえる。かつて、日本人研究者が、韓国人研究者が閲覧すること、また発表することの困難な、越・拉北文学者の作品を見、それに関する研究成果を発表したというような、有利な立場にあるということとはなくなった。資料に関しては、同じ条件下に立ち、研究を競う時代になったのである。言葉を替えれば、韓国人研究者も、もはやある資料を見られない、見るのが困難だ、という理由は成り立たなくなったということである。<sup>(28)</sup>同じ地平に立っているという認識、双方の努力が要求されている。

## 註

- (1) このうち、『巴人 金東煥』は、「49回目の光復節」を迎えた1994年8月15日付の序文を付しているので、「解放50周年に焦点を定めた」ものではないが、結果的にそうなっている。「解放50周年」を避けたところに著者の気持ちが表われているかもしれない。なお、引用文献

は、原文が朝鮮語の場合、標題、本文とも引用者訳による日本語訳文で統一する。以下同様。

(2) キム・ジウン記者「“自分の父親を告発する心情で…” 民族問題研究所等民族団体、親日文学人名簿42人発表」、Oh my News 2002.8.14。http://banmin.or.kr。

(3) 金基鎮の場合、後述するように、1988年に6巻本全集が文学と知性社から刊行され、これには親日的な文章も収録されている。ところで、金基鎮が解放後は韓国で文壇の長老として遇されながらも、この時まで全集が出されなかったのは、彼の文学の文学史的位置や、植民地末期の親日的な行為など様々なことが考えられるが、もっとも大きな要因としてはプロレタリア文学者としての経歴が関係していると思われる。そしてそれが、87、88年の越・拉北文学者の解禁措置で、多くのプロレタリア文学者に対するタブーが解かれたことによって、金基鎮の場合も障壁がようやく障壁でなくなったものと解釈できる。それに対して、「親日」問題は、韓国社会にあって「終結」したということが言いにくい、また別種のタブーである。

(4) 金英植は次のように書いている。「父が、日帝末期頃の一時期犯した恥辱的な親日行為を悔い、変節苦衷を告白しながら、「反逆の罪人」であったのを自ら認めていたことを反芻しつつ、私は家族を代表して、国家と民族の前に深く頭を垂れ、謝罪する。そして、わが民族の魂を詠み、われわれを描いた彼の作品と文は、私とわが家門にとってのものだけではないのであり、わが民族に惜しまれる民族言論人、民族文人、民族雑誌発行人として足跡を残したという道が許されていることを心から願う。」、前掲『父、巴人金東煥』、序文 pp.6～7。

(5) もっとも、越北文学者として、表面に現れるのはずっと後のことになるにもかかわらず、後世の研究者たちの文学史記述における林和の影響は大きいものがある。ただ、本稿は、研究史を「越北」「親日」という観点と絡めて見ようとするものであるので、解放前のこれら研究成果については別途章を設けることをせず、この脚注で触れるに留める。朝鮮における最初の文学通史としては、自山安廓の『朝鮮文学

史』(1922、韓一書店)をあげられるが、内容は朝鮮朝までで、新小説には筆は及んでいない。それに続くのが金台俊の『朝鮮小説史』

(1933、清進書館。増補1939、学芸社)で、新小説を扱っており、実質的に近代朝鮮文学へ連なる最初の言及、文学通史として記憶されるべきものである。また、林和は、1935年のカップ解散後、数度にわたって文学史の記述に取り組んでいる。それらは次のとおりである。①「朝鮮新文学史論序説」(『朝鮮中央日報』1935.10.9~11.13)、②a「概説新文学史」(『朝鮮日報』1939.9.2~11.25)、b「新文学史」(『朝鮮日報』1939.12.5~27)、c「続・新文学史」(『朝鮮日報』1940.2.2~5.10)、d「概説朝鮮新文学史」(『人文評論』1940.11~41.4)、③「小説文学の20年」(『東亜日報』1940.4.12~20)。さらに彼は、1940年1月13~20日にかけて『東亜日報』に、文学史記述の方法論を「朝鮮文学研究の一課題—新文学史の方法論」として発表した。これら林和の論考は、いわゆる「移植文学」の概念を述べている点、またその文学史的な枠組みなどから、いくつかの問題点を含みながら、今日にいたるまで影響を及ぼしている記述である(これらの論考は、現在活字化され『新文学史』(林奎燦・韓辰日編、ハンギル社、1993)として一冊にまとめられていて容易に手にすることができる)。

(6) これは1948年頃に脱稿されている。朴英熙が朝鮮戦争中に拉北されたため、草稿のまま残され、序論、第一篇、第二篇が「現代韓国文学史」という標題で『思想界』1958年4月~1959年4月号に掲載された。さらに、後に、最終章第三篇の自筆原稿の存在が明らかになり、金允植著『朴英熙研究』(ヨルム社、1989.7)の巻末付録として活字化、公開された(前掲、pp.251~315)。

(7) 代表的なものとして、先述の、1945年12月末にソウルの鳳凰閣で開かれた「文学者の自己批判座談会」(『人民芸術』第2号、1946.10)がある。ここに同席した8名の文学者のうち、3名の在日文人以外も、後にすべて越北する。

(8) このような雰囲気第一期における近代文学研究は、解放後の研究者の第一世代、全光鏞(1919~1988)により進められた一連の新小

説研究に代表される。これは、植民地期の金台俊、林和らの新小説研究を引き継ぎ、一定の水準まで進めた、韓国の近代文学研究史における本格的な研究として、事実上最初の成果といえる（『新小説研究』『思想界』1955.1～56.11、「李人植研究」『ソウル大論文集』6、1957。これらは後に『新小説研究』（セムン社、1986）としてまとめられている）。

(9) 一方、少し後には、同じ暗い時代にあって、民族の矜持を保った文学者もいたという観点からの論文も発表され始めた。宋敏鎭（1922～）の「日帝末 暗黒期文学の抵抗」（『東方学志』1968.12）、また、植民地期全般として、金容稷・廉武雄の『日帝時代の抗日文学』（新丘文庫、1974）等。

(10) そうした中で、次の論文は重要である。金允植「韓日文学の関連様相」「日帝末期韓国文壇の関連様相」、（以上『韓日文学の関連様相』、一志社、1974年に収録）。三枝壽勝「状況と文学者の姿勢—日帝末期親日文学の場合」（慶熙大学修士論文、1977.2）。

(11) この世代が中心となる第二期から、韓国において本格的な近代文学研究が開始されたと見ることができる。1970年代初から中盤にかけては、研究第二世代に当たる当時の若手研究者が争って成果を公にしている。例えば次のようなものである。

申東旭（1932～）『韓国現代文学論』（1972）、金容稷（1932～）『韓国現代詩研究』（一志社、1974）、金澤東（1935～）『韓国文学の比較文学的研究』（1972）、李在銃（1936～）『韓国開化期小説研究』（1972）、『韓国短篇小説研究』（1975）等。

これらに特徴的なことは、その対象が、第一期を引き継いだ開化期か、プロレタリア文学を除外したものであることで、同時代的に比較してみると、金允植の『韓国文芸批評史研究』が突出したものであることがわかる。

また、日本人研究者の以下のような論文は、林和、李泰俊という、いずれも当時の韓国人研究者が接近することの困難だった越北文学者を対象としたもので、その意味で先駆的なものといえ、同時に、内容

においても高く評価されているものである。

大村益夫 (1933～)「解放後の林和」(『社会科学討究』35号、早稲田大学、東京、1967)、長璋吉 (1941～89)「李泰俊」(『朝鮮学報』、朝鮮学会、天理、1979)、三枝壽勝 (1941～)「李泰俊作品論」(『史淵』117輯、九州大学文学部、福岡、1980)、「解放後の李泰俊」(『史淵』118輯、九州大学文学部、福岡、1981)。

- (12) 『学術院論文集 (人文・社会科学篇)』第VI輯、大韓民国学術院、1967.6.25、pp.51～130。
- (13) もっとも、金允植は、『韓国文芸批評史研究』とまったく同時に、11編の論文をまとめた『近代韓国文学研究』(一志社)を刊行している(どちらも1973年2月25日発行)。両著は互いに補完しあう関係にあり、合わせて朝鮮近代文学の輪郭を示すようになっていることも考慮すべきであろう。
- (14) これをうけて座談会「越北文学をどう見るか」がもたれた。『新東亜』1978.5。
- (15) 88年に刊行された金澤東著『鄭芝溶研究』(民音社)の序文の日付は「1982年」になっている。
- (16) 例えば、金允植『韓国現代文学批評史』(ソウル大出版部、1982)や権寧珉『韓国近代文学と時代精神』(文芸出版社、1983)など。
- (17) 洪命憲の代表作『林巨正』は、既に1985年に図書出版四季節から9巻本として刊行されている。
- (18) 例えば、1989年9月8日には、東国大学仏教学部学生会主催で、「民族の知性、碧初洪命憲先生 思想と文学の再照明」が開かれ、宋建鎬、李浩哲が講演を行なっている。
- (19) 『実録親日派』(トルベゲ、1991)など。
- (20) 『親日派』I～III(学民社、1990、1992、1993)、『人物で見る親日派の歴史』(歴史批評社、1993)など。
- (21) 『民族正義の審判』『反民者大公判記』『反民者罪状記』『親日派群像 予想登場人物』は新たに活字に生まれ、合本として、『親日派罪状記』(学民社、1993)という標題で出版されている。

(22) かつて、『親日文学評論集』（実践文学社、1987）、『親日文学作品選集』（1、2、実践文学社、1986）が刊行され、近年、李京墳の訳で『李光洙親日小説発掘集 心相触れてこそ』（平民社、1995.2）が出たが、もし「親日文学」を正面から論じるのであれば、日本語が身につけていなければならないであろう。これが、現在の研究世代、研究第3、第4世代の課題であるといえる。李京墳は、短いがともかくも日本留学経験者である。

(23) 「解放50周年記念 親日文学と抗日文学比較シンポジウム」1995年6月17日。

(24) 1987年以前のものに関しては、布袋敏博「日帝末期日本語小説研究」（1996.2）巻末参考文献を参照。

(25) この選定と連動した作業として、『実践文学』2002年秋号（67号、2002.8）は、民族文学作家会議・民族問題研究所・『実践文学』三者共同作成の「親日文学作品目録」（整理・金在湧）を掲載しているが、その「凡例」に選定基準が掲げられている。前掲 p.124。

(26) それらは次の通りである。『李光洙とその時代』（全3巻、ハンギル社、1986。のち、改訂増補版、ソル、1999）、『金東仁研究』（民音社、1987。のち、改訂増補版、2000）、『廉想渉研究』（ソウル大出版部、1987。のち増補）。『安壽吉研究』（正音社、1986）や『朴英熙研究』（ヨルム社、1989）も広い意味で同じ範疇に捉えられるかもしれない。

(27) 本稿では、韓国での論考を中心とし、その他地域での研究状況についてはほとんど触れられなかった。次の課題としたい。

(28) なぜわざわざ、こうしたことを事々しく述べるのか。次のような事例が見られるからである。あえて名前を挙げることは避けるが、2つだけ触れておきたい。

一つは、越北文学者の例である。越北詩人研究の中には、他人が探し出し運んできた資料を目にし、発表してしまうというような例が見られる。この筆者の場合、ある越北詩人の解放前の作品を中心に、90年代初に論文を発表している。それはそれでいいのであるが、その10

年ほど後に、その詩人が越北後発表した詩集を用いて、また文章を発表した。問題は、それが、他人が探し出し運んできた資料を用いてのことであったという点である。ところで、北朝鮮文学を研究する場合、まず大きな障害として立ちはだかってくるのが、資料問題である。その資料は世界各地に点在しているといってよい。現在までのところ、解放後、北部朝鮮地域で、どのような作品が発表されたのか、その全体像はいまだ明らかになっていない。これらを明らかにするためには、長期にわたる、地道で着実な調査作業が不可欠である。万一、韓国人研究者が越北文学者について文章を書こうとする時、海外に資料調査に赴くことが叶わなければ、まずソウルの北韓資料センターに足を運んで、その所蔵資料を丁寧に調査する必要があるはずである。上記の筆者も、本気で当該詩人の越北後の研究をするのであれば、その約10年という長い間に、一度は北韓資料センターに足を運んで、調査をしていなければならないはずである。しかしながら、上記の筆者は、その間、一度も北韓資料センターに足を運ぶこともしないまま、長い年月をやり過ごした。そして、偶然、他人が探し出し運んできた資料を目にして、それを使ってまず発表し、その後で、北韓資料センターに赴いているのである。後の北韓資料センター行きは、辻褄合わせ、アリバイ作りという他ないであろう。こうした一連の行為は、研究者のそれというよりは、即席の業績作りに躍起になっている売文家を髣髴とさせるし、その書かれたものも、出来栄えがどうであれ、決して認められるものではない。韓国には、金在湧・円光大学教授のように、早くから北朝鮮文学の資料を求めて、世界中を調査して回り、その調査に基づいて優れた研究成果を発表している立派な研究者がいる一方で、例外的とはいえ、上記のような例が見られるのは惜しまれてならない。

もう一つは、同様に、植民地期の在日朝鮮人文学研究の中で、日本語も十分でないまま、他人の論文と酷似した文章を綴り、発表している例である。在日朝鮮人文学を研究するには、日本語の習得は、必要不可欠なことであり、そのためにいくら時間がかかろうとも、それは

最低限費やさねばならない時間・労力である。それを、そうした条件も整わないのに、まずプロジェクトを組み、予算を獲得して、それを消化しなければならないからと資料の協力を求めてき、驚いたことには、上記のような文章を綴って、それらを単行本として公にしているという例が現実にある。これも、研究というよりは、実績作りの気持ちが先行した例であると指摘せざるを得ない。論議が逆立ちしているのである。これはまた、「在日朝鮮人」というものを、同族であるという名分のもとに、極めて安易に考えている証左でもあろう。いままし着実な姿勢が求められる。